

神 (2/2) : 理解の

:

明:神の御 の一部を理解出来ないことは、かれの存在を否定する根 とはなりません。

目:[事イスラ ムの真 性を示す数々の ~~神の~~存在](#)

より: ロ レンス B ブラウン博士

日4 Mar 2011

集日 14 Mar 2011

神 者の の大半は、慈 深き神と人生における不正の数々との 立において挑 します。しかし宗教者らは、そういった挑 は知性的な不 であるとしします。つまり私たち人 は自らも造の一部でありながら、神の 造物がどうあるべきかを神よりもよく知るかのような 度をとっており、それは 大なる に する感 の念の欠如を示しているというのです。

多くの人々が人生におけるある 面を理解出来ずにいるという事 ゆえに、神への信仰を思いとどまるべきではありません。人 の役割とは神の性 とその存在を うことでも、それを否定することでも、自身の才能に慢心することでもなく、人生における人 としての役割を め、与えられた 内で最善を尽くすことなのです。 である上司の行いが に入らなかつたり、彼の した行 が理解できなかつたりするという事 は、彼の存在を否定することにはなりません。むしろ各人の任 とは、 を全うして 与を受け昇格することでしょう。同 に、神による 造物への指令を理解しない、または めないことは、かれの存在を にはしません。そうではなく、 いを犯すこともある の上司とは い、定 上 的真理である神は に正しいために して いを犯すことはなく、人 はその事 を 虚に めなければなりません。人 は んで服 して屈礼し、かれの を理解できないことは、かれ自身の失策などからくるものではないことを 知すべきなのです。かれこそは 造主であり、その全知全能性からすべての 事を命令するのであり、私たちは にその 象であることに留まり、自分たちの人生を支えられているに ぎません。

神の存在を 認めてはいても、 酷でときには苦痛に ちた人生を送っている混乱した敏感な魂には、同情された上で 明をしてあげることが必要でしょう。人がもし、神が私たちが何をしているか知っており、私たち自身でさえ知らないことを知るということを 認めるのなら、私たちが心の奥底で最初にそうであると感じたことは、 には なっているかもしれないという理解の仕方に安堵すべきでしょう。おそらく、人 のなかでも邪 悪な者たちは、人には推し量ることのできない理由によって人生での取り分を定められているのかもしれませんが、または 世においては苦 を被り、来世では永久の を受けるのかもしれませんが。神はその恩 を受けた 造（ 言者）にし、最も 大なり物である 信、 望、 示などを授けましたが、彼らでさえ 世においては苦 の だったのです。事 、 言者のそれと比べれば、大半の人々の苦 や は色褪せてしまうでしょう。多くの人々がひどく苦しむことは 確かですが、神の恩 を受け授かった人 の模 範である 言者も、来世での と引 えに 世の苦しみを味わったという希望のメッセ ージがあるのです。人は 世における苦 や に耐えぬき、真の信仰を 持つことで、それと同 の を受けることを期待することができるでしょう。

同 様に、不信仰な暴君や抑 制者が 世ではあらゆる享 を受けつつも、来世ではその正反 となることを人が期待するのは 理もないことでしょう。ここで、地 の住人として知られるある人々が思い浮かびます。たとえば、ファラオは自らを至高の神であると主 張するほどまでに 雅な生活を 営んでいました。彼が放屁したのなら、 う意 もあったことでしょうが 。とにかく、彼が 住する された住 居?想て 不 を持っているであろうことは当然のこととして予 言できることですし、彼の 豪華な食卓、甘い香りのする女中たちの ことでさえ、灼 の 境においては慰安を失っていること でしょう。

大半の人々は、不愉快な出来事が原因で、素晴らしかった一日にもかかわらず、その日の わりには 嫌が かったという があることでしょう。 ひとりとして豪華 な食事の の 婚、ロマンティックな出来事の のエイズ感染、祝宴の の交通事故などには を 出さないはず です。あんなことさえなければ という思いで一杯になるはずでしょう。同 様に、たとえ どんなに幸福で、その期 がいかに かれ、一瞬にしてその がかき消されてしまうほどに 全身を完全に 焦がされてしまったのであれば、この世での幸せなど全く意味を成さ ないのです。片手の一面は人 の身体の表面部の1%を 成しており、台所での指先のや

人々の多くは人生の目的に して いますが、多くの 宗教における信仰者たちの立 は、上
のものと全く同じなのです。つまり、人 が存在するのは神に仕え、崇 するため以外の
何ものでもないということです。すべての 造と、そこにおけるあらゆる要素は、人 が
その を全うすることが出来るかどうかを しているか、あるいは支援しているのです。
と い、人は神に する自らの 任を避けて通ることが出来ます。しかしながら、 世での生
命という一 の保 察期 が われば、精算の期日が 期で れるのであり、その日を赤字で迎え
ることだけは避けなければならないのです。

フランシス ベ コンはこの付 を めるに相 しい、素晴らしい言 を述べています：“神を否
定する者たちは、人 の高 さを破 する。なぜなら人 は肉体において と同 だからである。
もし彼が魂において神と同 でなければ、彼は卑しくあさましい生き物なのである。”²
スタンリ ミラ とハロルド ユ リ の原始ブイヤベ スの泡（ 者注： 化 を茶化した著者の表 ）
から数百万年 にバ ベキュ にでも出来そうなものが 生するということを信じたとしても
、私たち皆がそれぞれ内に感じるもの 魂 の重要性について考 しなければならないので
す。人 のすべてはそれを有し、それこそが人と 物とを分け隔てる、形而上学的な根本
要素なのですから。

直接体 をすることの出来ないことを疑 する人々は、魂を否定するための弁明を探すで
しょう。しかし彼らは乏しい仲 しか つけることが出来ないはずです。さらに、 は真 の
性 のひとつである知 と へと み、それらは必然的に次の 目である不可知 へと突き かすの
です。

Footnotes:

¹ この 事は元々、同著者による “The First and Final Commandment” という本の付 事でした。

² Bacon, Francis. *Atheism*. p. 16.

この 事のウェブアドレス:

<https://www.islamreligion.com/jp/articles/484>

著作 2006-2015 断 を禁じます。 2006 - 2023 IslamReligion.com. 断 を禁じます。